

中国語における二重主語

—日本語との対照研究から—

劉 琳

要 旨

日本語には二重主語文が存在するが、中国語文法では主語は1つであるといわれており、中国語での二重主語文の存在は認識されていない。本稿では日本語の二重主語文と対照しつつ、中国語の二重主語文の存在を確認し、さらに中国語二重主語文の特徴を明らかにする。ここで得られる認識は、日本語、中国語の言語教育に役立てることができるものと思われる。

キーワード：二重主語 主語 主題 構造 日中対照

1 はじめに

本稿では「象は鼻が長い（象が鼻が長い）」のように「XはYが～（XがYが～）」の形をしていて、XとYがともに「ガ格」にある文を「二重主語文」と呼ぶ。日本語ではこのタイプの文がよく使われるが、1つの文には主語が1つしかないと考えられている中国語を母語とする日本語学習者にはこのタイプの文を理解することが難しい。

日本語の二重主語文と対照させて考察すると、中国語では1つの文に本当に主語が1つしかないのかという疑問、実はこのタイプの二重主語文も中国語に存在するのではないかという疑問が出てくる。

本稿では、日本語の二重主語文と比較しつつ、中国語における二重主語について考察し、中国語二重主語文の存在と特徴を明らかにしたい。

2 先行研究

2-1 日本語の二重主語文

2-1-1 日本語の二重主語文について

日本語の二重主語に関しては少なからぬ先行研究があるが、本研究では今泉（2003）の理論に依拠して考察する。今泉（2003:4-21）によれば、日本語の二重主語文には6種類のものがある。「彼女は花が好きだ」（感覚主語、帯感主語）、「象は鼻が長い」（本主語、属性主語）、「田中さんは英語が話せる」（行為主語、態主語）、「彼は宿題がしてある」（テ主語、対テ主語）、「私は明日が忙しい」（時場主語、一般主語）、「学生は3人来た」（時差主語、数量主語）の6種類であるが、本研究で扱うのは2番目の「象は鼻が長い」のタイプである。

「象は鼻が長い」のタイプの構造は、今泉（2005:174-179）によれば、ある主語（象）が単位構造（鼻が長い）を属性として持つ構造であり、この種の構造には3種類がある。「形容詞」「断定基」「動詞」を属性とする3種類である。まず、この3種類について概観する。

1) 形容詞の場合

例：象は鼻が長い。（図1 a）

この文には主体が2つある。「象」と「鼻」であるが、両者は性格が若干異なっている。「象」は文の全体の主体であり、「本主体」である。「鼻」は「鼻が長い」という属性の部分のみでの主体であり、「属性主体」である。属性の「長い naga.k-」は「形容属性（形容詞）」である。

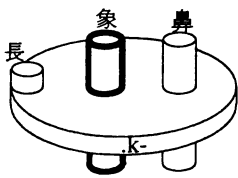


図1 a

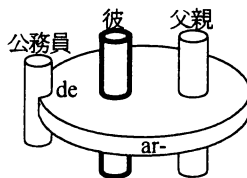


図1 b

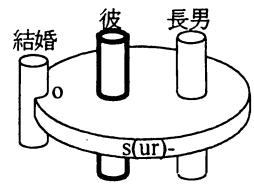


図1 c

2) 断定基の場合

例：彼は父親が公務員だ。（図1 b）

上の形容詞の場合に説明したことに準ずる。「彼」が「本主体」であり、「父親」が「属性主体」である。「である de ar-」は断定基である。

3) 動詞の場合

例：彼は長男が結婚する。（図1 c）

「彼」が「本主体」であり、「長男」が「属性主体」である。「する s(ur)-」は動詞である。

2-1-2 日本語二重主語文の特徴

今泉（2005：179-189）はさらに、このタイプの構造の特徴を8項目挙げている。

1) 明瞭な関係

属性主体として可能なのは、本主体と明瞭な関係をもつ実体（名詞）である。

2) 「の」によるつなぎ描写①「本主体」→「属性主体」

この構造を完結した「文」として描写する場合、「の」によるつなぎ描写は、「本主体」→「属性主体」の方向のみが有効である。

3) 「の」によるつなぎ描写② 属性による実体（名詞）修飾

属性で実体修飾をする場合は、「の」によるつなぎ描写は双方向が可能となる。

4) 「の」によるつなぎ描写③

本主体はそれと特定できる実体（名詞）であるべきである。

5) 属性主体を主題化しない場合

単位構造はまとめて描写した方がよい。

6) 属性主体を主題化する場合

聞き手の構造再現に混乱を生じる場合があることに注意すべきである。

7) 本主体が複数ある場合

「場の主体」「時の主体」/「本主体」「副次主体」

8) 属性主体が複数ある場合

以上 2-1 が今泉（2005）の単位構造を属性とする構造における二重主語のとりえ方の概要である。

2-2 中国語の二重主語文

2-2-1 主語について

『現代漢語』（1995:317）によれば、現代中国語の主語は次のようなものである。

1) 主語は動詞述語に対するものである。たとえば、英語文法の中で、subject は predicate verb に対するものである。主語と述語は一定の関係を持つ。

2) 主語とは話し手が陳述する対象である。主語は陳述されるものであり、述語は主語を陳述するものである。ここで述べた主語と述語は“完全”なのであり、主語、述語になる成分は単語であれ、連語であれ、主語以外の部分は述語であり、述語以外の部分は主語である。

3) 主語は話題（topic）として考えられる。話題の定義は範囲が広いが、文が陳述するものであれば、話題として考えてよい。

『現代中国語総説』（2004:282）では、主語とは話し手が陳述する対象であり、名詞や名詞性の連語、人称代名詞などがよく主語になるという趣旨のことが述べられている。

上記のいずれにも「二重主語」に関する記述はない。

2-2-2 主題について

高 (2004:193) は、主題とは陳述する中心であり、既知情報を表す名詞ないし、名詞化した語句であるという趣旨のことを述べている。

しかし、陳述する中心・対象という言い方は曖昧なので、中国語文法学界ではよく議論されている。

胡 (1982) は、文には内層構造と外層構造があるとしている。主語が文の内層構造の成分であり、主題が外層構造の成分である。主語は文の内層構造を外層構造と区別するものである。主語より左側の部分が外層構造であり、主語より右側の部分（主語も含む。）が内層構造である。

2-2-3 主題文について

高 (2004:233-235) は主題化について、以下の趣旨のことを述べている。() 内の日本語訳は本稿筆者の付けたものである。

主題は動詞の前の N から分化されたものと考えてよい。すなわち、

$$N + V = N_1 + N_2 + V。$$

のとき、 N_1 が主題であり、 N_2 が主語である。これはさらに次のような関係にある。

$$N + V = N_1 + \text{的} + N_2 + V = N_1 + 0 + N_2 + V$$

V は述語を表す。N は「名詞 (N_1) + 的 + 名詞 (N_2)」の形で所属関係を表わせることがあるが、所属関係を表わす「的」は常に「零位」と考えられ、所属関係も弱くなることもあり、 N_1 と N_2 は独立性を持つ主題と主語になる。

我的腰疼 (私の腰が痛い) = 我腰疼 (私は腰が痛い)

$$\begin{array}{ccccccc} \text{我} & \text{的} & \text{腰} & \text{疼} & = & \text{我} & \text{腰} & \text{疼} \\ \hline N_1 & + & \text{的} & + & N_2 & + & V & \\ \hline N & & & & & & & \end{array}$$

さらに主題化するには、次のような感嘆詞を用いた形にする。

$$N + V = N_1 + \text{感嘆詞 (嘛、呀...)} + N_2 + V$$

这本书内容不错 (この本、内容がいい)

= 这本书嘛, 内容不错 (この本はね、内容がいい)

$$\begin{array}{ccccccc} \text{这书} & \text{内容} & \text{不} & \text{错} & = & \text{这书} & \text{嘛、} & \text{内容} & \text{不} & \text{错} \\ \hline N_1 & + & N_2 & + & V & & N_1 & + & \text{感嘆詞} & + & N_2 & + & V \\ \hline N & & & & & & & & & & & & \end{array}$$

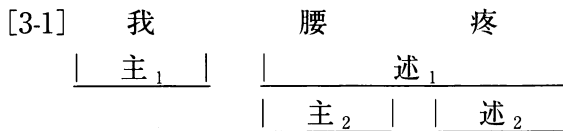
以上の先行研究からは、中国語の中に主題と主語があることが明らかになったが、主題がもう1つの主語であることがまだ言えていない。つまり、以上の先行研究では、中国語の二重主語に関してはまだ触れられていない。

主題である成分が主語であるかについての検討が必要である。そこで、文の構造から考えてみたい。

3 対照研究でとらえる中国語二重主語

3-1 主題文における二重主語

房(2001)では、本冊および別冊解答書において、文の構造を図を用いて示している。その図にならって「我腰疼(私は腰が痛い)」を図示すれば、次のようになる。



「我(私)」(主₁)は文の全体的な主語であり、「腰疼(腰が痛い)」(述₁)という属性をもつ主語として理解できる。このとらえ方では主題が主語であることが明らかになる。この属性「腰疼(腰が痛い)」においては、内部で主述関係が成立しており、文の構造を形成している。「腰」(主₂)はその文の中にある主語であり、述題主語とすることができる。つまり、「我(私)」(主₁)が主題主語であり、「腰(腰)」(主₂)が述題主語である。2つの種類の主語が1文を構成している。二重主語である。

この関係がさらにはっきりわかるように、今泉(2005)にならった構造図にしてみると図2 a のようになる。この構造図では、「我(私)」(主₁)が文の全体的な主体であり、「本主体」である。「腰(腰)」(主₂)は「属性を構成するかぎりの主体」であり、「属性主体」である。

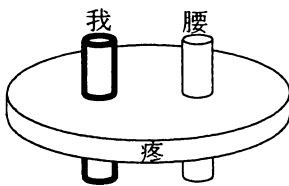


図 2 a

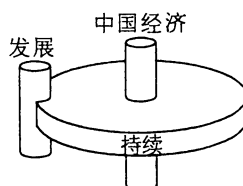


図 2 b

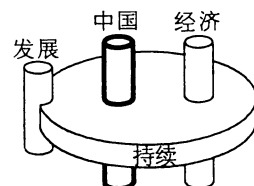


図 2 c

次の例でも同様のことが言える。

[3-2] 中国 经济 持续发展。(中国は経済が発展しつづける。)

主 ₁	述 ₁
主 ₂	述 ₂

図2 bでは「中国 (中国)」が「经济 (経済)」を修飾する役割を果たしているため、「中国经济 (中国経済)」 = 「中国的经济 (中国の経済)」が成り立っている。しかし、所属関係を表わす「的」は「零位」とも考えられ (2-2-3)、所属関係も弱くなり、「中国」(主₁) と「经济 (経済)」(主₂) は独立性を持つ主題と主語になる。つまり、図2 cになる。図2 cでは、「中国」(主₁) は文の全体的な主語であり、「经济持续发展 (経済が発展しつづけていく)」(述₁) という属性をもつ主語である。この属性「经济持续发展 (経済が発展しつづけていく)」(述₁) の内部では主述関係が成立し、文が形成されている。「经济 (経済)」(主₂) はその文の中の主語である。つまり、「中国」(主₁) が主題主語であり、「经济 (経済)」(主₂) が述題主語であり、二重主語になっている。

3-2 存現文における二重主語

次に存現文の場合について考えてみたい。

[3-3] 小王死了父亲。(王さんは父親が死んだ。)

この文は中国語文法で分析すると、「小王 (王さん)」が主語であり、自動詞である「死 (死ぬ)」が述語であり、「父亲 (父親)」が目的語である。しかし、「小王 (王さん)」が主語であれば、「死んだ」のが「小王 (王さん)」であると解釈できるが、実に「死んだ」のは目的語の「父亲 (父親)」である。つまり、文法的には主語は「小王 (王さん)」であるが、意味的には主語は「父亲 (父親)」である。そのため、「小王死了父亲」という文は矛盾していることになる。そこで、この文「小王死了父亲」の形を変えてみる。

「小王死了父亲」 → 「小王父亲死了」

文の成分の位置を変えれば、主題文である「小王父亲死了」になる。

小	王	父	亲	死	了。
主 ₁		述 ₁			
主 ₂			述 ₂		

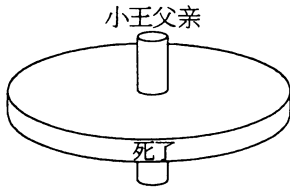


图 3 a

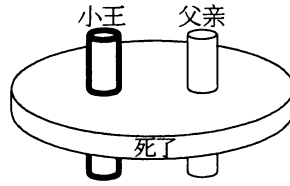


图 3 b

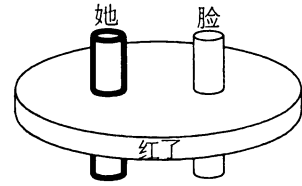


图 3 c

图 3 aでは「小王（王さん）」が「父亲（父親）」を修飾しているため、「小王父亲（王さん+父親）」＝「小王的父亲（王さんの父親）」が成り立つ。しかし、所属関係を表わす「的」は「零位」と考えられ、所属関係も弱くなり、「小王（王さん）」（主₁）と「父亲（父親）」（主₂）は独立性を持つ主題と主語になる。それで、图 3 bになる。图 3 bでは、「小王（王さん）」（主₁）は文の全体的な主語であり、「父亲死了（父親が死んだ）」（述₁）という属性をもっている。この属性「父亲死了（父親が死んだ）」（述₁）は主述関係の成立する文になっている。「父亲（父親）」（主₂）はその文の中にある主語である。つまり、「小王（王さん）」（主₁）が主題主語であり、「父亲（父親）」（主₂）が述題主語である。以上のように分析してみれば、「小王（王さん）」（主₁）が本主体であり、「父亲（父親）」（主₂）が属性主体であることになる。

「小王死了父亲（王さんは父親が死んだ）」の場合、「小王（王さん）」（主₁）は主語の位置にあるが、事実上の主語は目的語の位置にある「父亲（父親）」（主₂）である。このため、「小王（王さん）」（主₁）が文法主語であり、「父亲（父親）」（主₂）が実主語であることになる。二重主語が存在している。

同様の例文をもう1つ挙げてみる。

[3-4] 她红了脸。（彼女は顔が赤くなった。）

この文では、「她（彼女）」が主語であり、自動詞である「红（赤くなる）」が述語であり、「脸（顔）」が目的語である。自動詞に目的語があるという矛盾がここにある。「她（彼女）」が主語であるのだから、文法的に言えば、「赤くなった」のは「她（彼女）」であるはずであるが、実に「赤くなった」のは「目的語」の「脸（顔）」である。つまり、文法的には主語は「她（彼女）」（主₁）であるが、意味的には主語は「脸（顔）」（主₂）である。それで、この文「她红了脸（彼女は顔が赤くなった）」の形を変えてみる。

她红了脸。→ 她脸红了。（彼女は顔が赤くなった。）

她	脸	红	了。
主 ₁	述 ₁		
	主 ₂	述 ₂	

形が変わって、主題文になる。そのため、「她（彼女）」（主₁）が本主体であり、「脸（顔）」（主₂）が属性主体であることがわかる。「她红了脸（彼女は顔が赤くなった）」の「她（彼女）」（主₁）は主語の位置にあるが、実の主語が目的語の位置にある「脸（顔）」（主₂）であるため、「她（彼女）」（主₁）は文法的主語であり、「脸（顔）」（主₂）は実主語である（図3c）。二重主語が存在している。

以上から、中国語にも日本語同様の二重主語文が存在するものと考えられる。

次に中国語の二重主語文の特徴について、今泉（2005:179-189）に依拠しつつ述べることにする。

4 中国語の二重主語文の特徴

4-1 明瞭な関係

この「明瞭な関係」に関わる特徴は日本語二重主語文の特徴1)にあたる。二重主語文では、「本主体」は、それについて何かを述べようとする名詞であるため、話者がそれについて何かを述べようとするものであれば、何でも「本主体」にできる。

一方、「属性主体」にすることができる名詞は何でもよいというわけではない。話し手が本主体と関係をもつと考える実体で、しかも聞き手がそれがどんな関係であるのかを推測できるような名詞でなければならない。これを「本主体と明瞭な関係をもつ名詞」という。明瞭な関係とは多くの場合、「全体と部分、所有、所属関係、それに準ずるもの」としての関係である。

たとえば、次のように関係をもつとは考えられないものが二重主語になっているときは非文になる。（*の記号は非文を表すものとする。）

[4-1] *天空人多。（空は人が多い。）

[4-2] *他翅膀大。（彼は翼が大きい。）

（ただし、「翅膀」が「能力」の比喩となっている場合には、「他（彼）」と明瞭な関係があることになり、非文ではなくなる。）

[4-3] *小王经济持续发展。（王さんは経済が発展しつづける。）

これに対し、属性主体が本主体と明瞭な関係をもっていると（話し手・聞き手によって）みなされる場合は次のように問題のない二重主語文になる。

[4-4] 中国人口多。（中国は人口が多い。）

[4-5] 她眼睛大。（彼女は目が大きい。）

[4-6] 印度经济持续发展。（インドは経済が発展しつづける。）

上述の

[3-3] 小王死了父亲。(王さんは父親が死んだ。)

の文の場合、本主体(小王[王さん])が属性主体(父亲[父親])と明瞭な関係をもっているとなせるため、二重主語文として成立するのである。この文で、例えば属性主体(父亲[父親])を(小李[李さん])に切り替えて

?小王死了小李。(王さんは李さんが死んだ。)

とすると、これは非文に近くなる。属性主体(小李[李さん])が本主体(小王[王さん])とどのような関係をもつのかを、普通はとらえることができないからである。

似たような非文に近い例を2つ挙げてみる。

[4-7] ?国防部死了一个老王。(国防部は王さんが死んだ。)

[4-8] ?这件衬衣掉了两个苹果。(このシャツはりんごが2つ落ちた。)

これらの文の中の本主体(国防部[国防省]、衬衣[シャツ])と属性主体(老王[王さん]、苹果[りんご])には所属関係が認められないため、意味が不明となる。これを、本主体と属性主体が強い所属関係をもつものに変更すれば二重主語文として成立する。

[4-9] 国防部死了一个处长。(国防部は部長が一人死んだ。)

[4-10] 这件衬衣掉了两个扣子。(このシャツはボタンが2つ落ちた。)

4-2「的(の)」によるつなぎ描写①「本主体」→「属性主体」

この特徴は日本語二重主語文の特徴2)であるが、中国語の場合にもあてはまる。「的(の)」はある構造上の名詞と名詞をつないで描写するために用いられ、構造図上では矢印で表現される。

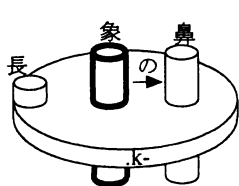


図4 a

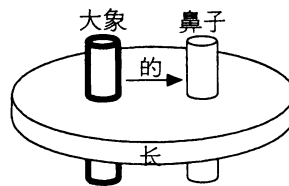


図4 b

「的(の)」で構造上の2主体をつなぎ、構造全体を文として完結して描写する場合は、つなぐ方向が決まっていて、「本主体」→「属性主体」の方向でなければならない。逆方向は非文となるか、意味(構造)を変えてしまう。

[4-11a] 大象的鼻子长。(象の鼻が長い。)

[4-11b] ?鼻子的大象长。(鼻の象が長い。)(逆方向)

[4-12a] 他的腰疼。(彼の腰が痛い。)

[4-12b] ?腰的他疼。(腰の彼が痛い。)(逆方向)

なぜ「本主体」→「属性主体」のつなぎ方が可能で、逆方向が不可能なのか。これは、この構造形式では、本主体「大象（象）」があくまでも単位構造「鼻子长（鼻が長い）」全体を属性としていることに原因がある。本主体「大象（象）」にとっては「鼻子长（鼻が長い）」全体が属性であるため、「长（長い）」という単一属性（主体をもたない属性）だけを属性としているかのような描写「大象长（象が長い）」では意図する意味伝達ができない（他疼「彼が痛い」も同様）。別の構造から描写される文のようになってしまい、意味を変えてしまう。

似たような例文を以下に示す。

[4-13a] 他的爸爸是工人。（彼の父親は労働者だ。）

[4-13b] ?爸爸的他是工人。（父親の彼は労働者だ。）（逆方向）

[4-14a] 中国的人口很多。（中国の人口は多い。）

[4-14b] ?人口的中国很多。（人口の中国は多い。）（逆方向）

[4-15a] 纸的颜色是红色。（紙の色は赤だ。）

[4-15b] ?颜色的纸是红色。（色の紙は赤だ。）（逆方向）

この各例の a では「属性主体」が単一属性の主体として表わされているため、正しい文となっている。各例の b では逆方向つなぎになり、「本主体」が単一属性のみの主体であることになるので、非文となるか、意味が変化してしまう。

4-3 「的（の）」によるつなぎ描写② 属性による名詞修飾

「本主体」→「属性主体」、「属性主体」→「本主体」

この特徴は日本語二重主語文の特徴3)にあたる。

4-2 では「的（の）」によるつなぎは「本主体」→「属性主体」の方向でなければならない。しかし、属性（動詞）で名詞を修飾するならば、逆方向（「属性主体」→「本主体」）の「的（の）」によるつなぎも可能となる。

[4-16a] 大象的长鼻子（象の長い鼻）（「本主体」→「属性主体」）

[4-16b] 鼻子长的大象（鼻の長い象）（「属性主体」→「本主体」）（逆方向）

[4-16a] では、「的（の）」により「大象（象）」と「鼻子（鼻）」の関係が示され、属性「长（長い）」がその属性の持ち主「鼻」を修飾しているので、問題がない。[4-16b] では、「鼻子（鼻）」と「长（長い）」が一体の単位構造として「象」を修飾している。単位構造「鼻子长（鼻が長い）」全体が、その単位構造を属性とする本主体「大象（象）」を修飾するので、問題がない。以下の例でも同じことが言える。

[4-17a] 今天的好天气（今日のいい天気）（「本主体」→「属性主体」）

[4-17b] 天气好的今天（天気の良い今日）（「属性主体」→「本主体」）（逆方向）

属性（動詞）による名詞修飾を伴う「的（の）」使用では、正しい構造形式が伝達・再現できるので、双方向の修飾が可能となるのである。

4-4 「的 (の)」によるつなぎ描写③ 本主体はそれと特定できる名詞であるべき。

4-3 のようなことが言えるのは、あくまでもどちらが本主体で、どちらが属性主体であるかが明瞭な場合である。この区別が不明瞭な場合には二義を生じ、曖昧文を生じてしまう。中国語の二重主語文では、「的」を置く位置により、二義を生じ、あいまいな文が生まれる。

[4-18a] 妻子的聪明弟弟 (妻の賢い弟)

[4-18b] ?妻子聪明的弟弟 (妻の賢い弟)

[4-19a] 姐姐的要结婚的女儿 (姉の結婚する娘)

[4-19b] ?姐姐要结婚的女儿 (姉の結婚する娘)

[4-18a] [4-19a] では、「的」が「妻子 (妻)」「姐姐 (姉)」の後に置かれたため、「聪明弟弟 (賢い弟)」「要结婚的女儿 (結婚する娘)」が一体の単位構造として「妻子 (妻)」「姐姐 (姉)」により修飾されている。単位構造が明瞭なので二義を生じない。

しかし、[4-18b] [4-19b] では、だれが賢く、だれが結婚するのか、明瞭ではない。属性主体は本主体との関係において表現されるものであるから、本主体はそれとして特定できるものでなければならない。しかし、[4-18b] [4-19b] では、本主体までもがある関係においての表現でしか表わされていない。つまり、どちらが本主体であるのか不明になっている。だから、[4-18b] [4-19b] では本主体のほうを特定化すればよいはずである。

[4-18c] 小文的聪明弟弟 (文ちゃんの賢い弟)

[4-18d] 小文聪明的弟弟 (文ちゃんの賢い弟)

[4-19c] 她的要结婚的女儿 (彼女の結婚する娘)

[4-19d] 她要结婚的女儿 (彼女の結婚する娘)

本主体を特定化すれば、「的」を置く位置にかかわらず、二義が生じなくなる。

4-5 本主体が複数ある場合……「場の主体」「時の主体」/「本主体」「副次主体」

この特徴は日本語二重主語文の特徴7)にあたる。

①「場の主体」「時の主体」

[4-20] 他夏天 (身体) 状况好。(彼が夏が (体の) 調子が良い。)

この文では、「(身体) 状况好 ((体の) 調子が良い)」という単位構造があり、その全体を主体「他(彼)」が属性として保持している。これにさらにもう一つの「夏天(夏)」という主体が現れている。(ここでは「身体」の扱いについて保留する。)

つまり、単位構造「(身体) 状况好 (<体の> 調子が良い)」の「実現する場」が主体「他(彼)」であり、「実現する時」が主体「夏天(夏)」である。ここから、主体「他(彼)」は「場の主体」、主体「夏天(夏)」は「時の主体」と呼ぶことができる。

②「本主体」「副次主体」

[4-20] で、それについて何かをいおうとしている「それ」に当たるものは「夏天(夏)」

ではなく「他（彼）」である。したがって「他（彼）」が本来的な主体、本主体である。これに「調子」が属性主体となっている。つまり、「他身体状况好（彼が調子が良い）」である。

「夏天（夏）」は「他・身体状况好（彼が・体の調子が良い）」という構造が成立する限りでの主体で、「他（彼）」と異なり、副次的な主体である。このことは

[4-21] 他身体状况好。（彼は調子が良い。）

は、これだけで完結した意味を構成するのに、

[4-22] 夏天身体状况好。（夏は調子が良い。）

では、だれの調子か、何の調子か尋ねたくなることから確認できる。（そのままだと、主語は話し手自身であるように解釈されてしまう。）

つまり、この場合、「場の主体」が主要な主体であり、「時の主体」が副次主体である、ということになる。「主体」には優先順位があるわけである。

③ 同格主体……「和」「同」「跟」「与」（と、に、や）を用いて描写

また、次のような形での複数の主体のあり方もあり得る。

[4-23] 小王和小刘夏天（身体）状况好。（王さんと劉さんは夏が（体の）調子が良い。）

[4-22] との違いは、重要度が同じ「場の主体」が2つあることである。「小王（王さん）」と「小刘（劉さん）」はいずれも「場の本主体」であり、全く同じ格にある。同じ格にある実体を列挙して描写しているので「和（と）」が用いられている。

4-6 属性主体が複数ある場合

この特徴は日本語二重主語文の特徴8)にあたる。

[4-24] 她眼睛和鼻子小。（彼女は目と鼻が小さい。）

ここでは、属性主体は「眼睛（目）」と「鼻子（鼻）」であり、これが「和（と）」により列挙されて描写されている。中国語でもこのように属性主体が複数ある場合がある。

次の文でも同様に、属性主体が複数認められる[鼻子、牙（鼻、牙）]。

[4-25] 大象鼻子跟牙长。（象は鼻と牙が長い。）

以上が、日本語二重主語文の特徴と共通する中国語二重主語文の特徴である。

なお、日本語にはこのほかに「属性主体を主題化する場合」（特徴5）、「属性主体を主題化しない場合」（特徴6）の2項目にそれぞれ留意事項があるが、「は」という明示形式を伴う日本語の主題化とはあり方の異なる中国語の主題化には該当しないと考えられるので、ここでは省略する。

5 結論

日本語二重主語文と比較しつつ、中国語の類似表現について考察した。その結果、中国語にも二重主語文が存在することが明らかとなり、その特徴も日本語のそれと共通する部分が多いことが判明した。

本稿では、まず 2-1 において、日本語の主語、主題、二重主語、二重主語文の特徴について述べた。次に 2-2 において、中国語の主語、主題に触れた。高順全 (2004) は中国語に主題と主題文の存在することを述べたが、それが二重主語であるとの認識には至っていない。

3-1 では中国語主題文「我腰疼 (私は腰が痛い)」において、3-2 では存現文「小王死了父亲 (王さんは父親が死んだ)」において、それぞれ二重主語が存在するかどうかを構造図を用いて考察した。その結果、主題主語「我 (私)」と述題主語「腰 (腰)」が存在することが明らかになった。存現文においては、文法主語「小王 (王さん)」と実主語「父亲 (父親)」が存在することが明らかになった。つまり二重主語の存在が明らかになった。

第 4 節では、中国語二重主語文の特徴について考察し、日本語二重主語文の特徴と共通するものが多いことが分かった。

本稿では、中国語二重主語文の存在を確認し、その特徴を明らかにできたと考える。ここに本稿の意義がある。さらに、この研究は中国人日本語学習者が日本語の二重主語構文を理解することに役立ち、また日本人中国語学習者が中国語文法を理解することに役立つものと思われる。

参考文献

- 1) 今泉喜一 (2005) 『日本語構造伝達文法』 揺籃社
- 2) 今泉喜一 (2003) 『日本語構造伝達文法 発展 A』 揺籃社
- 3) 大河内康憲 (2000) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版
- 4) 北原保雄・他 (1985) 『日本文法事典』 第 3 版 有精堂
- 5) 久野暁 (1988) 『日本文法研究』 第 12 版 大修館書店
- 6) 小池清治 (1988) 『大学生のための日本文法』 有精堂
- 7) 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房
- 8) 佐藤喜代治 (1988) 『日本文法要論』 第 8 版 朝倉書店
- 9) 島田勇雄 (1973) 『国語概説』 おうふう
- 10) 寺村秀夫・他 (1987) 『ケーススタディ日本文法』 おうふう
- 11) 北原保雄 (1987) 『日本語文法の焦点』 第 2 版 教育出版
- 12) 庭三郎 (2009 検索) 「現代日本語文法概説」

(<http://www.geocities.jp/niwasaburoo>)

- 13) 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- 14) 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 [編] 松岡榮志・古川裕 [監訳]
(2004) 『現代中国語総説』三省堂
- 15) 松村明 (1987) 『日本文法大辞典』第8版 明治書院
- 16) 山中桂一 (1998) 『日本語のかたち - 対照言語学からのアプローチ』
東京大学出版会
- 17) 高順全 (1994) 从单项 NP 句看句子的主语和主题、《语言文字学》第12期
- 18) 高順全 (1998) 句首位置与主题化、《汉语学习》第5期
- 19) 高順全 (1999) 与汉语话题有关的几个问题、《语言教学与研究》第4期
- 20) 高順全 (2004) 《三个平面的语法研究》学林出版社
- 21) 胡裕树 (1982) 试论汉语句首的名词性成分、《语言教学与研究》第2期
- 22) 胡裕树 (1992) 语法研究的三个平面、《语文学习》第1期
- 23) 胡裕树主编 (1995) 《现代汉语（修订本）》上海教育出版社
- 24) 房玉清 (2001) 《实用汉语语法（修订本）》北京大学出版社
- 25) 范晓 张豫峰等 (2003) 《语法理论纲要》上海译文出版社
- 26) 李临定 (1985) 主语的语法地位、《中国语文》第1期
- 27) 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆
- 28) 朱德熙 (1987) 句子与主语、《世界汉语教学》第1期